



秋を歩く

色に包まれる東中

写生会の時はまだ早かった東中の紅葉も、いつの間にか最盛期を迎えたようです。様々な種類の木々が色づき始め、学校の周囲はまるで錦の襦のほりで飾り立てられたようです。それでは紅葉に包まれた若葉台東中の様子を見てみましょう。カツラやセイヨウミズキ、イチョウなど大きな木々の他にも、よく観察してみるとヤマイモのような小さな植物も



葉の色を変えていることに気がつきます。紅葉の他にも木の実がいくつか目に止まりました。これはシラカシの実でしょうか、サツマイモ畑の耕地あ



とにたくさん落ちていました。あと半月もすれば木々はすっかり葉を落とし冬支度が整います。木枯らしも吹き、冬本番ということになるのでしょうね。風邪には要注意です。



秋の日は釣瓶(つるべ)落とし



日暮れはすぐそこ、慌てて・あわてて・・・もう走り方が変だよ～

この言葉通り、晩秋ともなると日暮れは駆け足で迫って来るようになります。遊びに夢中で気がついたときにはすっかり日も傾き、辺りは薄暮はくぼに包まれています。大慌てで家路を急いだことなど思い出しました。皆さんはこれをお聞きになり、「何でそんなに慌てたの?」とお思いでしょう。実のところ、およそ40年前の横浜は、中心部を一步離れると、夜は漆黒の闇が広がる地域も多かったのです。今の若葉台で例えるなら、さしずめ夜中に三保市民の森へ分け入ったようなものです。当時、子供にとって暗間はまだ恐ろしく感じられる存在だったので、家路を急いだわけなのです。畏敬いけいの念というと大げさかもしれませんが、子供心に自然の奥深さのようなものを感じていたのかもしれませんが。現代都市が放つ過剰なまでの光りの洪水からは想像もできませんが・・・。記憶の底に眠る、遊び帰りに見た光景。夕間に浮かび上がる雑木林のシルエットを思い起こすと、「暗がり体験」も貴重であったなと思えるのです。それゆえ、「省エネ」などすっかり忘れ去れてしまった感のある現代都市の姿に愁うれいいを覚えてしまうのです。